

# 日本人性の意識化と異文化能力の形成 —キャリア体験学習(国際・台湾)における 学生の変容を手がかりに—

法政大学キャリアデザイン学部 教授 松尾 知明

## 1 問題の所在

グローバル化が加速するなかで、異なる人との間での相互交流と相互依存が著しく進んでいる。国内においても、人手不足の分野にも外国人労働者を受け入れる2018年の入国管理法改定により、今後、一層の外国人数の増加が見込まれている。日本においても本格的な移民時代が到来したといえるだろう。こうした背景から、変化が激しく予測困難なグローバル・多文化社会を生き抜き、効果的に機能することのできる「異文化間能力」<sup>1)</sup>の育成が大きな課題となっている。

そのため、大学教育においては、異文化間能力を高めるために、海外研修や留学などの海外での教育体験が重視されるようになってきている。一方で、海外体験学習の教育成果の把握については、「視野が広がった」「成長した」などの実践報告や満足度調査に留まっており、理論的な枠組みに基づいた分析は十分であるとはいえない。

日本においては、海外体験学習についての関心は高まっている一方で(例えば、子島・藤原、2007、友永、2019、森茂・津山・村田、2016)、異文化間能力の育成に向けた研究はあまり進んでいない(松尾・森茂、2016)。とくに、海外の現地研修や短期留学などの実践研究は、異文化間能力形成の理論的な枠組みやその育成プロセスの解明などの点で課題が残されている。

そこで、本稿では、キャリア体験学習(国際・台湾)<sup>2)</sup>を対象にして、日本人性の概念をもとに、学生の経験と意識変容を分析することを通して、異文化間能力を形成するプロセスの概念化を試みることを目的としている。

ここで、日本人性とは、アメリカの白人性(Whiteness)研究(Frankenburg,1993)に着想を得た概念で、日本人/非日本人(外国人)の差異のポリティックスによって形成されるもので、目に見えない文化実践、自分・他者・社会を見る見方、構造的な特権から構成されるものである(松尾、2005)。小論では、とくに、「日本人性の意識化」が異文化間能力を育成する上での重要な契機となることを明らかにしたい。

## 2 理論的枠組みと研究方法

### (1) 日本人性、経験学習理論、変容的学習論

分析にあたっては、日本人性の概念、D.コルブ(D. A. Kolb)の経験学習理論<sup>3)</sup>、J.メジロー(J. Mezirow)の変容的学習論<sup>4)</sup>をもとに行いたい。

#### ①日本人性

日本人性は、日本社会において自明視されている価値観・規範・コミュニケーション様式・キャリア観などの総体であり、普段は不可視であるが、日本人であることの「当たり前」を支えている枠

組みである。この概念を導入することで、多文化共生の課題をマイノリティ支援の問題としてではなく、マジョリティである日本人自身のあり方を問い直す問題として再定位するものといえる。

台湾でのキャリア体験学習において、日本人性の意識化は、日本人とは異なる外部との接触によって可視化され、相対化され、さらに再構成されるプロセスとして位置づけることができる。

## ②コルプの経験学習理論

コルプは、経験学習理論において具体的経験、省察的観察、抽象的概念化、能動の実験といった循環モデルを提唱している。この論は、学習を経験の変容と捉える枠組みを提示するものである。

キャリア体験学習は、このモデルに従えば、具体的経験（現地企業・学生との交流）、違和感（価値観の揺さぶり）、振り返り、日本的規範の再解釈という循環が生起するものとして捉えることができる。学生は現地での具体的体験を通して違和感を抱き、その後の振り返りを通して意味づけを行っている。

## ③メジローの変容的学習論

メジローは、変容的学習論において、成人学習における本質的変化を、意味パースペクティブの変容として説明している。変容的学習は、ディスオリエンティング・ジレンマ（価値の揺らぎ）、批判的省察、新しい枠組みの構築として展開されるとしている。

キャリア体験学習において、変容の契機となる学生の感じる違和感は、この既存の意味枠組みが揺らぐ「ジレンマ」に対応している。その後の省察を通して、日本的な価値観や規範が相対化され、新たな枠組みが形成される。本研究の日本人性の意識化は、この批判的な省察にあたるものと捉えることができる。

## (2) 研究の方法

本研究の対象は、2024年度に法政大学キャリアデザイン学部で実施されたキャリア体験学習

（国際・台湾）を履修した学生10名である。分析資料は以下である。

- ・事前／事後自己評価
- ・台湾イメージの事前／事後の記述
- ・体験学習の振り返りレポート
- ・報告書

本プログラムを通じた学生の経験と変容の詳細については、松尾（2005）に整理している。これをベースに本稿では、さらに質的データの分析を進め、共通する変容パターンを抽出し、理論的な枠組みを踏まえて考察を行った。なお、参加学生の1年間の学びの振り返りについては、表1を参照されたい。

## 3 キャリア体験学習（国際・台湾）の概要と学生の経験と変容

### (1) キャリア体験学習（国際・台湾）の概要

2024年度のキャリア体験学習（国際・台湾）の概要については、春学期の授業では、台湾を知るために、地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなどに焦点をあて、調べ学習や文献研究などをもとに、台湾とはどのような場所か、キャリアのあり方は日本とどんな違いがあるのかなどの問いに答える形で、台湾についての理解を深めていった。また、オンラインで台湾の元智大学学生と交流したり、台湾からの留学生から話を聞いたりした。これらの学習を踏まえて、台湾でのキャリア体験学習における課題を設定し現地研修の計画を立てた。並行して、春学期を通して現地での意思疎通を円滑にするために中国語の初歩を学習した。

事前指導を踏まえ、台湾でのキャリア体験学習では、8月2～12日の11日間、企業等訪問、インターン、法政大学台湾校友会会員へのインタビュー、元智大学の学生との交流や寮生活、台北、台中、台南でのフィールドワークなどを実施した。

秋学期には、台湾や台湾の人々、キャリア、台湾と日本のつながりなど、現地での体験学習で学んだことを振り返りながら、ポスターや報告書、

動画を作成することを通して「体験の言語化」を図った。こうした学びの成果をまとめ表現する活動を通して、自分自身のキャリアデザインについての見方や考え方がどのように変化したり深まったりしたのかについて内省的に検討を行った。

## (2) キャリア体験学習での経験

### ①企業訪問とインターンシップ

キャリア体験学習では、異なる言語や文化のもとで働くことについて体験的に知るために、2日間のインターン、および、企業訪問を実施し、2024年度については、①インターン先としては、(1)日立ハイテク、(2)遊学台湾、(3)東北ジャパネットネットワーク、(4)律師事務所、(5)凌巨科技、(6)台湾奇士美化粧品 (kiss me)、(7)瀧澤科技、(8)東野精機、②企業訪問先としては、三信商業銀行、新竹サイエンスパークを対象とした。

現地でのインターンや企業訪問で見聞きすることで学生はそれぞれ、異なる言語や文化のもとで働くこと、台湾社会の実際の働き方、日本との就労意識とキャリア観の違いなど、グローバルなキャリアについて実感を伴った理解をすることができた。とくに2日間のインターンシップの経験は印象に深く刻まれており、海外で働くことのやりがいや可能性、難しさについて体験的に理解し、自身のキャリア観を再考する契機となっている。

台湾の働き方は、信頼関係や個人の裁量を重視し、日本型の年功序列とは異なる側面ももっていた。これらを見聞きした体験は、学生たちにキャリア観の揺らぎをもたらし、「日本の当たり前」が絶対ではないことへの気づきとなっていった。さらに、日本的な雇用慣行や固定的なキャリアモデルを相対化する視点が芽生えるとともに、キャリア選択の多様性を認識できるようになった。

### ②校友会会員へのインタビュー

法政大学の卒業生で構成される法政大学台湾校友会の協力を得て、国際的にも活躍されている陳春裕さん、陳致宇さん、三浦直矢さんの3名の先輩方をお呼びし、キャリア形成についてのお話を

お聞きした。冒頭に5分程度ずつ順番に話をしてもらい、その後グループになって、準備してきた質問を中心にしながら20分程度ずつ聞き取りを行った。

台湾で活躍する卒業生のライフヒストリーを聴く経験は、グローバルなキャリア形成の実像を知る機会となった。学生にとっては、語学の大切さ、海外の企業で働くこと、外資系企業の特徴、異なる文化のなかで生きること、挑戦することの大切さなどについての視野を広げる機会になった。また、先輩方のキャリアにおける成功の背後にある行動力や挑戦の積み重ねを知ることで、キャリアを主体的に切り拓く姿勢の重要さへの気づきを得ている。

グローバルに活躍し、挑戦し続ける法政大学の先輩からお話を直接聞いたことで、グローバルなキャリア形成についての理解が深まるとともに、自らのキャリア形成への主体的な行動の重要性を再確認し、挑戦することへの意欲を高める機会となった。

### ③元智大学学生との交流や寮生活

キャリア体験学習は、法政大学の海外協定校でもある元智大学の協力のもとに実施している。オリエンテーションでは、応用言語学科の学生とグループワークを行った。また、学生寮では、台湾人学生と共同生活をし、フィールドワークにおいても行動を共にした。

同世代の元智大学学生との交流は、言語的な困難があったものの、親密な対話の体験を可能にし、本音を出した深い対話へと発展していった。日本語、中国語、英語を混用しながらの文化差を越えたコミュニケーションの経験は、国際交流への自信と楽しさを生み出すものであった。

台湾学生の親切さや面倒見のよさに触れた経験は、日本的な遠慮やよそよそさを相対化するもので、他者理解を深めるものであった。また、対話を通して、日本と台湾の間における大学生の就活についての意識、キャリア観や就労意識の違い、国際交流の楽しさなどを学んでいた。

#### ④フィールドワーク

台北・台中・台南でのフィールドワークは、歴史、文化、日本との関係を身体的に理解する機会となった。観光的なイメージを越えて、教育事情や社会の実状への関心が広がる機会となった。また、こうした経験により、台湾の文化の理解を深めるとともに、日本とのつながりの深さを実感することとなった。

また、フィールドワークを通して、日本統治時代の痕跡や社会構造の多層性に触れ、日本と台湾の歴史的関係を再考する契機となった。歴史的な痕跡を目にすることで、単純な「親日」だけでは説明できない歴史的な文脈をもつ複層的な関係として考えるようになり、表層的理解から構造的な理解へと深化した。

### (3) 学生の変容

事前学習の段階における学生の台湾イメージは、観光地、料理、半導体など、メディアや教科書を通じて形成された表層的・断片的な理解に留まっていた。これは、日本社会の知識生産の枠組みのなかで台湾を捉えている状態といえる。別の言い方をすれば、日本人性の視座から他者を位置づけている状態であったといえる。そこでは、日本を中心とする同心円的なパースペクティブが無意識に働いていたと思われる。

それが、現地での体験を通して、学生の認識は大きく揺さぶられ、台湾について、観光や食文化を中心とした表層的な理解から、実体験に基づく具体的・関係的な理解へと進化していったといえる。台湾の人々との対話や現場での生活の経験により、自明であった日本型雇用慣行や年功序列的な発想などのキャリア形成のあり方の前提が覆されることになり、自らのキャリア形成を相対化し、再構成する機会となったのである。

さらに、こうした認識変容が知的な理解に留まらず、挑戦することへの大切さ、行動する勇気といった態度面への変容にもつながっていた。学生は「失敗を恐れる」「空気を読む」などの日本社会において内面化されがちな失敗を避ける文化や

同調圧力から一定の距離を取り、キャリア形成に向けて自ら踏み出すことへの意欲や構えを獲得するといった、自己を再定義する経験をしたものといえる。

## 4 異文化間能力の形成過程と日本人性の意識化

### (1) キャリア体験学習での変容のプロセス

ここでは、海外体験学習において学生に生じた変容のプロセスを整理する。本研究の分析の結果、学生の変化は直線的な変化ではなく、経験→違和感→省察→再構成という循環的なプロセスとして捉えられることが明らかになった。

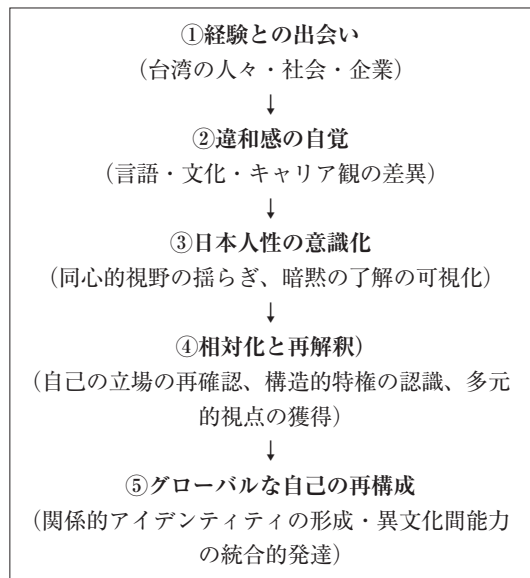


図1 キャリア体験学習での変容プロセス

第一に、経験との出会いの段階では、日本社会を離れた、台湾での具体的な体験学習が出发点となる。インターン、学生との交流、日常的な観察や行動など、多様な場面での実体験は、未知の価値観や行動様式との接触をもたらした。学生は当初、事前学習で形成した台湾像をもとに体験を解釈しようとするが、その枠組みとは必ずしも一致しないことを経験する。

第二に、違和感の自覚の段階で、こうした不一

致は違和感として意識されることになる。柔軟な働き方、台湾の学生の主体性や発言の率直さ、日本へのまなざしなどは、学生がこれまで形成してきた日本的な価値観とは相いれないものであった。この違和感が、「なぜそうなのか、それはどこからくるのか」などといった問いを引き出す契機となった。

第三に、日本性の意識化の段階では、振り返り活動を通じた意味づけが行われる。グループ討議やレポート作成などの省察的実践において、学生は体験の言語化を行う。この過程で、日本人としての自己の立場が意識化され、出来事は単なる印象から意味のある学習経験への再編成される。

第四に、相対化と再解釈の段階では、既存の枠組みの再検討が始まる。違和感を起点とする省察によって、自明であった日本中心の同心円的な価値観や行動様式の前提に揺らぎが生じる。学生は、自分の考えが文化的に形成されたものである可能性に気づき、台湾での体験との比較のなかで自己を相対化していく。この段階で、日本社会や自己のキャリア観に対する再解釈が生じる。

第五に、グローバルな自己の再構成の段階では、将来像の再構築へとつながっていく。台湾で出会った働き方や価値観は、学生のキャリア観の再考を促すようになる。従来の安定志向から挑戦志向、国際志向へと意識の変容が確認された。このような変容は、職業選択の幅が広がるといった次元にとどまらず、どのような社会のなかで、いかに働きたいのかといったキャリアをめぐる価値の再構成を伴うものであった。

以上のプロセスは、経験学習理論が示す「具体的経験-省察-概念化-実践」の循環と整合するものである。同時に、違和感を起点とする意味枠組みの再構成という点では、変容的学習理論の理論的枠組みにも対応するものといえる。とくに重要であるのは、変容が外面的な行動の変化ではなく、日本人であることの前提そのものの再検討を含んでいる点であろう。この変容過程の中核に位置するのが、日本人性の意識化である。

## (2) 日本人性の意識化

日本人性は通常、日本国内においてはほとんど意識されにくい。同質性の高い社会空間においては、日本人的なあいまいさ、間接的コミュニケーション、同調志向、失敗回避の傾向、年功序列的なキャリア観などは「文化」ではなく「常識」として内面化される。その結果、学生は自らの思考様式や将来像を、文化的に構築されたものとしてではなく、普遍的で自然なものとして理解しがちである。

海外体験学習は、こうした自明性に揺さぶりをかける契機として機能する。台湾社会との出会いは、日本人中心の同心円的なパースペクティブを相対化する出来事となる。台湾学生の率直な発言や主体的な行動様式、また、現地での柔軟な働き方などに接することで、これまでの前提としていた日本的な価値観や規範が唯一絶対ではないことが露わになる。ここに、違和感を伴う意識の揺らぎが生じる。

この揺らぎは、文化差の理解に留まらない。自らの思考様式や行動規範そのものが対象化される契機となる。暗黙の前提とされていた日本的な前提が可視化され、「文化」として自覚されるのである。

さらに重要なのは、「日本人として語る」経験である。台湾において日本の文化や社会について説明する場面では、自文化を自明な背景としてではなく、外部に開かれた対象として再構成する必要性が生じる。何を「日本」として語るのか、どの側面にアクセントを置くのかを選択する過程で、日本人性は固定的な属性から関係的に構築されるアイデンティティへと転換されるのである。

ここで日本人性は、「生まれながらにもつ属性」ではなく、「対話のなかで語り直される立場」として再定位される。これは、学生がアイデンティティを実体的概念ではなく、関係的・状況的概念として捉える契機となるのである。

加えて、日本人性の意識化は、構造的側面への気づきにもつながる。台湾における日本人へのまなざしや、日本文化への親和性の背景には、歴史

的・経済的関係が存在している。学生がそうした関係性に思い至るとき、日本人であることは単なる文化的特徴ではなく、歴史的に形成された位置性 (positionality) を伴うものであることが理解され始める。

また、台湾における少数派の経験は教育的に重要であるが、それが一時的であり、日本社会という多数派の空間に戻ることに前提となっているという事実も同時に認識される。ここで、日本社会における自らのマジョリティ性が相対化される。この点において、日本性の意識化は、文化理解の次元を越えて、社会構造への省察を含むものへと拡張される。

以上のように、日本性の意識化とは、①暗黙の前提の可視化、②意味枠組みの揺らぎと再構成、③関係的アイデンティティへの転換、④構造的位位置の理解、という多層的過程から成り立つものである。こうした過程を経ることで、異文化間能力は、単なるコミュニケーション技術ではなく、自文化を批判的に省察しつつ他者との関係を結ぶ力として深化する。したがって、日本人性の意識化は、異文化間能力育成の中核的な要素として位置付けられるものといえる。

## 5 考察

本研究の分析から明らかになったのは、キャリア体験学習 (国際・台湾) が、単なる知識習得や文化理解の深化にとどまらず、日本人性を可視化し、再解釈する教育的装置として機能しているという点である。

質的データの分析からは、①固定化された台湾像の揺らぎ、②日本社会の相対化、③自己の立ち位置への省察、④将来のキャリア観の再構築といった変容のプロセスが確認された。とくに重要なのが、こうした変容が「他者理解」の深化としてのみではなく、「自己理解」の更新として生じている点である。

学生の変化は、台湾という文化の理解が深まったという水準を越え、自らの価値観や規範が文化

的に構築されたものであることへの気づきを得るものであった。日本人性は可視化され相対化され、関係的な主体として再構築されていったのである。このことは、日本人性の意識化が学習過程の中核に位置していることを示している。

さらに、日本人性の意識化は、構造的側面への気づきを伴う場合がある点も重要である。台湾との歴史的関係や、日本人であることが交流条件に影響している可能性に言及した学生の記述は、自己の位置性への認識を含んでいた。また、台湾でのマイノリティ体験が一時的であり、日本社会という多数派の空間に戻ることに可能であるという事実は、自己のマジョリティ性を再確認する契機ともなっている。

これらのことは、異文化間能力が単なるコミュニケーション技能ではなく、自らの文化的前提や社会的立場を省察し、それを相対化・脱中心化する力を含むべきであることを示唆している。異文化間能力を、他者理解の能力としてのみ定義するのは不十分であり、自己の位置づけを問い直す批判的側面を含む概念として再定義する必要があるといえる。

本研究が提示した「経験-違和感-日本人性の意識化-相対化-再構成」というプロセスモデルは、異文化間能力形成を動的・循環的過程として理論化する試みである。異文化間能力の形成は一回的な到達点ではなく、揺さぶりと再構成を繰り返す継続的な学習過程として理解されるべきものなのである。

以上の点から、キャリア体験学習 (国際・台湾) は、キャリア意識の形成にとどまらず、多文化共生社会を担う主体を育成する教育の基盤として再定位されることになる。他文化の理解は同時に自己理解であり、他者との出会いは「日本」という自己を問い直す契機をもたらす。この循環運動こそが、グローバルなキャリア形成の土台となると考えられる。

## 6 おわりに

本稿では、キャリア体験学習（国際・台湾）における学生の経験と変容を、日本人性の意識化と異文化間能力の形成の観点から分析した。経験学習理論および変容的学習論を参照しながら質的データを検討した結果、海外体験学習における学習過程は、①経験との出会い、②違和感の自覚、③日本人性の意識化、④相対化と再解釈、⑤グローバルな自己の再構成へと展開するプロセスとして整理できることが明らかになった。

本研究の中心的な知見は、異文化間能力の形成過程の中核に、日本人性の意識化が位置しているという点にある。学生の変容は、台湾理解の深化という変化にとどまらず、日本的な価値観や規範が文化的に構築されたものであることへの気づきといった自己の意味枠組みの再検討にまで及んでいた。海外体験学習は、他者理解の装置であると同時に、日本人性を可視化し、相対化し、再構成する教育的契機として機能していたといえる。

このことは、異文化間能力を単なるコミュニケーション技能として捉える見方を超え、自らの文化的前提や社会的位置を省察する批判的能力を含む概念へと再定義する必要を示唆している。異文化間能力の形成は、他者理解と自己理解の往還運動として生起する動的過程であり、日本人性の意識化はその転換点となる契機である。

また、本研究は、日本人性という概念を分析軸に据えたことで、多文化共生の課題をマイノリティ支援の問題としてのみではなく、マジョリティ側の前提を問い直す問題として位置付け直すといった教育実践の新たな方向性を位置づけるものである。実践にあたっては、海外体験学習において違和感を契機とした省察を意図的に設計すること、歴史的・構造的な文脈への理解を組み込むこと、「日本人として語る」経験を重視することなどが、学習の深化に寄与することが示唆されるだろう。

今後の課題としては、本研究の対象が限定的であることから、サンプル数を拡大するとともに、

異なるプログラムや属性を持つ学生への適用可能性を検討する必要があるだろう。また、日本人性の意識化が長期的に持続するのか、キャリア選択や行動変容にどのような影響を与えるのかについての研究の発展が考えられる。さらに、日本人性の問いは、国籍のみならず、ジェンダー、階層、言語、宗教などの社会軸と交差するマジョリティの問題へと理論的に拡張していく必要があるだろう。

### 注

- 1) 異文化間能力とは、一般には、異なる文化と文化とが接触する状況において、効果的に機能することのできる能力をいう。本稿では、異文化間能力を、日本人性の議論を踏まえて、「自らの日本人性について意識化し内省的にその社会的意味を検討するとともに、異なる人々を尊重し効果的にコミュニケーションをとり多文化共生の実現に向けて協働する力」と捉えることにしたい。
- 2) 法政大学キャリアデザイン学部では、2018年より、キャリア体験学習（国際・台湾）を実施している。このプログラムは、日本との関係が深いものの理解のあまり進んでいない台湾を事例として、グローバルな視野に立ったキャリアデザインについて考察することを目的としている。同プログラムは、春学期の事前学習、台湾での体験学習、秋学期の事後学習から構成され、①台湾の歴史や社会、文化、人々についての理解を深め、②交流のための中国語の初歩を学び、③台湾の大学生、企業、法政大学台湾校友会会員の方々との交流、および、④現地台湾でのインターンシップを行うことで、⑤グローバルなキャリアデザインについての考察を深めるものである。
- 3) コルブ（1939-）はアメリカの教育理論家、心理学者で、「経験学習論」を提唱し、学習を経験の変容として捉える枠組みを提示した。このモデルは、企業研修や専門職開発にも応用されている。
- 4) メジロー（1923-2014）はアメリカの社会学者で、「変容的学習理論」の創始者として知られている。彼の先陣教育論は、教育、看護、組織開発など多

分野で応用されている。

#### 参考文献または引用文献

- 栗山有子 (2024) 「キャリア体験学習 (国際・台湾) から考えるグローバルキャリアー 2020 ~ 2023 年度の国内代替体験学習と海外現地体験学習を中心に」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 Vol.21、75 - 108 頁.
- 子島進・藤原孝彰編 (2007) 『大学における海外体験学習の挑戦』ナカニシヤ出版.
- 友永雄吾 (2019) 『スタディツアーの理論と実践-オーストラリア先住民との対話から学ぶフォーラム型ツアー』明石書店.
- 松尾知明 (2005) 「『ホワイトネス研究』と『日本人性』-異文化間教育研究への新しい視座」異文化間教育学会編『異文化間教育』第 22 号, アカデミア出版会, 15 - 26 頁.
- 松尾知明 (2010) 「問い直される日本人性-白人性研究を手がかりに」渡戸一郎・井沢泰樹編『多民族化社会・日本-<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』明石書店, 191 - 209 頁.
- 松尾知明 (2021) 「異文化間能力とグローバル体験学習プログラム-キャリア体験学習 (国際・台湾) を事例として」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 Vol.18、3 - 14 頁.
- 松尾知明 (2023) 『日本型多文化教育とは何か-「日本人性」を問い直す学びのデザイン』明石書店.
- 松尾知明 (2025) 「キャリア体験学習 (国際・台湾) における学生の経験と変容」『生涯教育とキャリアデザイン』 Vol.22, No.2、83 - 96 頁.
- 松尾知明・森茂岳男 (2016) 「異文化間能力を考える-多様な視点から」異文化間教育学会編『異文化間教育』第 45 号、19 - 33 頁.
- 森茂岳雄・津山直樹、村田晶子編 (2016) 『大学における多文化体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版.
- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編 (2016) 『体験の言語化』成文社.
- Frankenberg, R. (1993) *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*, University of Minnesota Press.
- Kolb, D. (1984) *Experiential Learning: experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs.
- Mezirow, J. (2000) *Learning as Transformation: Critical Perspectives on a theory in Progress*, Jossey-Bass Inc.

表1 1年の学びを終えて

A	<p>特に心に残っていることは、言語力と行動力がいかに重要かということです。法政大学の卒業生である法政校友会の先輩方の話の中で、“言語力があるかないかでキャリアアップのスピード感や仕事の幅が大きく変わってくる”、“言語力はどんな仕事のスキルよりも実践的に活用することのできる重要な力である”というお話をこれまでの自身の経験をもとにお話ししていただきました。そのお話を聞いたことに加えて、台湾で実際に生活する中で言葉が通じないことへの大変さを実感し、言語力の重要性を肌で感じることができました。この経験から大学生という時間の制約が少ない今のうちに言語力を身につけるための勉強に励もうと感じました。また、台湾では経営者の方など色々な社会人の方と直接お話をさせてもらう機会がありました。お話しさせていただいた皆さんがおっしゃっていたのは「失敗を恐れずに挑戦すること」がどれだけ大切なことかについてでした。何事も挑戦しないとまず可能性もない、挑戦して失敗する経験から多くのことを学び成長できるなどの話を聞いて、まず挑戦することの重要性を再認識し、キャリアアップに成功されている方の行動力の高さを実感することができ、とても貴重な経験となりました。</p>
B	<p>私はこの11日間の体験を通して、自分から積極的に行動する力がついたと感じています。事前学習や当日のフィールドワークでは自分たちで考えて計画を立てたり、中国語で企業の方やタクシートの運転手さんとお話したり日本にいたら考えられない体験を通じて成長をすることができました。それまでは言語の壁や、文化、宗教の違いなど「海外」とひとくくりにして、異文化を体験するのは怖いと躊躇していましたが、電車の乗り換えやお店の中で会話など様々な場面で困ったことがあってもインターネットで調べればかりでなく、積極的に現地の人に聞いて行動することができました。完璧な中国語、英語ではありませんでしたが、台湾の方は一生懸命理解しようとしてくれたり、知っている日本語で伝えてくれたり人の温かさを感じる瞬間が多くありました。海外の文化や人々にもっと触れたいと感じたのでこれからもっと言語学習に力を入れていくとともに、チャンスがあったら迷わず飛び込んでみようと思います。</p>
C	<p>春学期の事前学習、夏休みの現地体験学習、秋学期の振り返り、全ての時間に大きな意味があり、この1年間で台湾について学ぶにあたり欠かすことのできない学びの時間だったと思います。私はこの体験学習での学びを得るまでは台湾についての知識はほぼゼロに等しく、中国語も挨拶しかできない程度でした。しかし、春学期の事前学習で歴史や文化、言語を学び、現地での体験をイメージしながら台湾の色に自分を染めていくことができました。現地の体験学習では本当にたくさんの人からたくさんの学びと、信頼とパワーをいただきました。秋学期は現地での一瞬一瞬の経験を思い出し、アウトプットすることができました。今では台湾に関わる有名な事柄、物のみならず、実際に足を運んで肌で経験したからこそわかる普通の人なら知らないような情報も知ることができました。何より私自身が成長することができたと思う点は、何事にも一歩踏み出す勇気です。この台湾での体験学習は、私の人生において本当にかけがえのない11日間であり、1年間であったと思います。</p>
D	<p>私がこの台湾プログラムを履修しようとした理由は自分を変えたかったからです。私は元々自分に自信がなくチャレンジしてみることが苦手で引っ込み思案な性格でしたが、社会に出る前の大学生という限られた期間の中で私は何事にも挑戦してみようと思ったので、この不思議で興味深いキャリア体験（国際）・台湾を履修しました。このプログラムに実際に参加し私は大きな成長を感じる事が出来ました。実際に台湾へ行きインターンシップを行い、社会人の方や元智大学生とのコミュニケーション能力が養われ、集団行動での臨機応変に対応する力も同時につけることができ自己成長に繋げることができました。また、普段生活していたら触れ合うことの出来ない異文化を体験したことで当たり前のように感じていた今の生活を見直すいい機会になりました。自分を大きく成長させることが出来たこのプログラムは、今後の自分のキャリアや人生に活かせると思います。</p>
E	<p>幼い頃、私にとって人生最初の海外旅行先が台湾でした。家族旅行で訪れたそのときから台湾には自然と親しみを感じていましたが、この一年を通じてさらに愛着が深まり、大好きな国となりました。1年間を通して台湾について学び、実際に訪れて多くの方々と交流を重ねる中で、日本との共通点や相違点を理解し、台湾の魅力をさらに発見することができました。私はこの台湾研修を通して、目的や目標を持って行動することの大切さを改めて実感しました。研修の準備段階として、春学期には台湾についての知識を深め、興味を最大限に引き出した状態で、目的を明確にして訪問しました。だからこそ、現地で見えるもの聞くもの全てへの解像度が高く、より多くの学びを得ることができたのだと感じました。この研修で培った、新しいことに積極的に飛び込む力、コミュニケーション力、情報収集力を生かして今後も様々なことに挑戦していきたいと思います。その中で、常に目標や目的を意識することを心掛け、自らの人生をより豊かにしていきたいと強く感じました。</p>

F	<p>この台湾での体験型プログラムを通して感じたことが2つあります。1つ目は、勇気をもって行動することの重要性です。私は経験がないことに対しても挑戦することを心がけており、インターン先では得意でない英語でも積極的に話し、現地の社員の方と交流しました。その結果、担当社員さんから通常の説明では知り得ない深い部分を教えていただくことができました。2つ目は、実際に訪れて視野を広げることの大切さです。台湾については食文化など一部は知っていたものの、現地で気候・文化・政治・歴史に触れ、五感を通じて理解を深めました。台湾の各地を訪れ、地域ごとの異なる雰囲気を知り、1つの国も地域ごとに捉える必要性を実感しました。また、ディスカッションや成果発表会を通じて、他の参加者が感じたことも学びに繋がりました。今後も台湾でできた友人と多岐にわたる情報交換を続けていきたいと考えています。</p>
G	<p>まずは率直に、台湾に行くことができ本当によかったという気持ちです。幼少期に中華圏に住んでいた経験がありながら、それをいまいち活かさないまま大学生になってしまった自分にとって、本授業はある種のターニングポイントとなりました。現地学習では、語学力を伸ばしたい、外国の方ともしっかり関わってみたい、という気持ちを遺憾なく発揮することができました。具体的には、元智大学の学生に趣味や勉強のことを、中国語や英語を混ぜて聞いたり、法政大学校友会の方々やインターン先の日本人駐在員の方に、勉強方法をうかがったりしたことです。他にも、言葉の壁を超えて笑い合うことができたのは、自分にとって大変貴重な経験となりました。一方で、大学の代表として現地へ行っていることへの自覚も忘れずに行くことができました。日本人として、日本の歴史や魅力、ポップカルチャーを台湾でできた友人に伝えることも意識しました。11日間での経験により、人生の選択肢が広まったと感じています。</p>
H	<p>僕はこの1年間で台湾について多くのことを学ぶことができました。前期の事前学習では台湾の歴史や政治、中国語など今まで知らなかった知識を得ることができました。現地での学習では前期で習った中国語を使って元智大学の学生と交流しました。その交流を通して他の国の人と交流することの楽しさを学ぶことができました。また、日本では経験できないことをこの授業を通して経験することができて、良い影響を受けことができました。そしてこの体験学習を経て挑戦することの大切さを感じました。この体験学習で台湾に行くまで海外に行ったことがなく、この授業を取ることを悩んでいましたが実際に台湾に行って自分の考えや視野を広げることができたので、挑戦してとても良かったと感じました。この経験を活かして今後の自分のキャリアを築いていきたいと思えます。</p>
D	<p>私がこの台湾プログラムを履修しようとした理由は自分を変えたかったからです。私は元々自分に自信がなくチャレンジしてみることが苦手で引っ込み思案な性格でしたが、社会に出る前の大学生という限られた期間の中で私は何事にも挑戦してみようと思ったので、この不思議で興味深いキャリア体験（国際）・台湾を履修しました。このプログラムに実際に参加し私は大きな成長を感じる事が出来ました。実際に台湾へ行きインターンシップを行い、社会人の方や元智大学生とのコミュニケーション能力が養われ、集団行動での臨機応変に対応する力も同時につけることができ自己成長に繋げることができました。また、普段生活していたら触れ合うことの出来ない異文化を体験したことで当たり前のように感じていた今の生活を見直すいい機会になりました。自分を大きく成長させることが出来たこのプログラムは、今後の自分のキャリアや人生に活かせると思えます。</p>
E	<p>幼い頃、私にとって人生最初の海外旅行先が台湾でした。家族旅行で訪れたそのときから台湾には自然と親しみを感じていましたが、この一年を通じてさらに愛着が深まり、大好きな国となりました。1年間を通して台湾について学び、実際に訪れて多くの方々と交流を重ねる中で、日本との共通点や相違点を理解し、台湾の魅力をさらに発見することができました。私はこの台湾研修を通して、目的や目標を持って行動することの大切さを改めて実感しました。研修の準備段階として、春学期には台湾についての知識を深め、興味を最大限に引き出した状態で、目的を明確にして訪問しました。だからこそ、現地で見えるもの聞くもの全てへの解像度が高く、より多くの学びを得ることができたのだと感じました。この研修で培った、新しいことに積極的に飛び込む力、コミュニケーション力、情報収集力を生かして今後も様々なことに挑戦していきたいと思えます。その中で、常に目標や目的を意識することを心掛け、自らの人生をより豊かにしていきたいと強く感じました。</p>

F	<p>この台湾での体験型プログラムを通して感じたことが2つあります。1つ目は、勇気をもって行動することの重要性です。私は経験がないことに対しても挑戦することを心がけており、インターン先では得意でない英語でも積極的に話し、現地の社員の方と交流しました。その結果、担当社員さんから通常の説明では知り得ない深い部分を教えていただくことができました。2つ目は、実際に訪れて視野を広げることの大きさです。台湾については食文化など一部は知っていたものの、現地で気候・文化・政治・歴史に触れ、五感を通じて理解を深めました。台湾の各地を訪れ、地域ごとの異なる雰囲気を知り、1つの国も地域ごとに捉える必要性を実感しました。また、ディスカッションや成果発表会を通じて、他の参加者が感じたことも学びに繋がりました。今後も台湾でできた友人と多岐にわたる情報交換を続けていきたいと考えています。</p>
G	<p>まずは率直に、台湾に行くことができ本当によかったという気持ちです。幼少期に中華圏に住んでいた経験がありながら、それをいまいち活かさないまま大学生になってしまった自分にとって、本授業はある種のターニングポイントとなりました。現地学習では、語学力を伸ばしたい、外国の方ともっと関わってみたい、という気持ちを遺憾なく発揮することができました。具体的には、元智大学の学生に興味や勉強のことを、中国語や英語を混ぜて聞いたり、法政大学校友会の方々やインターン先の日本人駐在員の方に、勉強方法をうかがったりしたことです。他にも、言葉の壁を超えて笑い合うことができたのは、自分にとって大変貴重な経験となりました。一方で、大学の代表として現地へ行っていることへの自覚も忘れずに行くことができました。日本人として、日本の歴史や魅力、ポップカルチャーを台湾でできた友人に伝えることも意識しました。11日間での経験により、人生の選択肢が広まったと感じています。</p>
H	<p>僕はこの1年間で台湾について多くのことを学ぶことができました。前期の事前学習では台湾の歴史や政治、中国語など今まで知らなかった知識を得ることができました。現地での学習では前期で習った中国語を使って元智大学の学生と交流しました。その交流を通して他の国の人と交流することの楽しさを学ぶことができました。また、日本では経験できないことをこの授業を通して経験することができて、良い影響を受けことができました。そしてこの体験学習を経て挑戦することの大切さを感じました。この体験学習で台湾に行くまで海外に行ったことがなく、この授業を取ることを悩んでいましたが実際に台湾に行って自分の考えや視野を広げることができたので、挑戦してとても良かったと感じました。この経験を活かして今後の自分のキャリアを築いていきたいと思います。</p>

# Awareness of Japaneseness and the Development of Intercultural Competence: Student Transformation in Career Experiential Learning (International: Taiwan)

MATSUO Tomoaki

---

This paper analyzes the process of developing intercultural competence through the “Career Experiential Learning (International: Taiwan)” program at the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies, Hosei University, focusing on the awareness of “Japaneseness.” Drawing on whiteness studies, the concept of “Japaneseness” is understood as the taken-for-granted framework of values, norms, and career perspectives embedded in Japanese society. The study highlights how overseas experiences serve as opportunities to make these implicit assumptions visible and open to critical reflection. The analysis is theoretically informed by Kolb’s experiential learning theory and Mezirow’s transformative learning theory, and is based on qualitative data from reflective writings by ten participating students.

Through company visits, internships, exchanges with Taiwanese university students, and fieldwork, students encountered differences in language, culture, and career values. Experiencing a sense of discomfort in unfamiliar contexts prompted them to question norms such as conformity, seniority-based systems, and other “common-sense” assumptions in Japan.

Through structured reflection, these taken-for-granted perspectives were relativized, leading to the reconstruction of their own career views and a greater willingness to take on new challenges.

The study models intercultural competence development as a cyclical process: experience, discomfort, awareness of Japaneseness, relativization, and self-reconstruction. It concludes that understanding other cultures is inseparable from deepening self-understanding, and that becoming aware of one’s own Japaneseness is central to forming individuals capable of living in a multicultural society.